

宗教者 手探りの支援

物心両面被災者に寄り添う

東日本大震災の被災者を支えようと、多くの宗教者が動いている。救援活動だけでなく精神的・宗教的な救済を担うことができるだろうか。現場の一例は――。

食料の寄付呼びかけ

震災の2日後。東京都の寺の副住職、吉水岳彦さん(32)を一人の男性が訪ねた。企業から食品を寄付してもらい、福祉施設などに届けるNPO「セカンドハーベスト・ジャパン」の配島一匡さん(33)だ。

「お寺さんで支援物資を集めてもらえないでしょうか」

出迎えた吉水さんは、浄土宗の僧侶が中心の「ひとさじの

会」の事務局長だ。会は、路上生活者におにぎりを配る活動をしている。旧知の2人は日ごろから、どんな協力ができるか話し合ってきた。

吉水さんはすぐ、全国に連絡網を張る宗派の青年会に「物心両面にわたる中長期的な支援」を呼びかけるメールを送った。

吉水さんは「お念仏のような支援をしたい、と話す。「南無阿彌陀仏」というお念仏をとなえることは簡単です。それと同じように、だれでも簡単にできる支援をたくさんの方がつなげて行うことは、とても尊いと思うんです」

反応は大きく、例えば滋賀県では檀家の協力も得て、米だけ

でたちまち7ト以上が集まった。

遺族と共に火葬場へ

3月下旬。吉水さんは配島さんが運転するトラックで宮城県に入った。約1千人が避難生活をしてきた石巻市の中学校の体育館には、被災した僧侶仲間の樋口伸生さん(48)一家がいた。寺は床上浸水。境内は、がれきで埋まっていた。

犠牲者はあまりに多く「仮埋葬」としての土葬が行われている。どうしても火葬を望む人たちは県北部や岩手県、山形県、秋田県まで行かねばならない。それぞれの斎場では僧侶が無償で読経している。ただ、最後にお骨を拾うところまではなかなか付き添ってくれない。

樋口さんは自分のことは後回しで、遺族と火葬場へ出かけている。遠いところは片道3時間。火葬のあとは、お茶を飲みながら遺族の話に耳を傾ける。ゆっくりでもいい。坂道をの

ぼってほしい。その手助けができれば、との思いがある。だからこんな話をする。「無事だったみなさんのいのちはいたいたいものです。世の中のために使いましよろよ」

家族が行方不明の人も多い。娘が見つからず、食事に手を付けようとしていない母親がいた。「娘が食べられずにいるのに、私がおにぎりをもらうわけには……」。樋口さんはこう話した。「いつか必ず、どこかで会わせていただけますよ」。母親は少しずつ現実を受け入れ始めたようだった。「私がしっかり生きて、供養をしなければいけませんよね」

午後2時46分、吉水さんは避難所から外に出て手を合わせた。地震が起きた時刻だ。浄土があると思える西方に向かって、念仏をとなえる。亡くなった方々が、お浄土に間違いなく迎えられるように。被災者の方たちに安らぎがありますように――。

(磯村健太郎)



避難生活中の子どもたちと吉水岳彦さん(中央)。樋口伸生さんの息子、慧樹(けいじゅ)くん(11)が吉水さんのカメラで撮った＝宮城県石巻市、吉水さん提供

「人間力で苦しみ受け止めて」

関西学院大・対馬教授

今、多くの宗教団体が救援活動に取り組んでいる。関西学院大学の対馬路人(つしま・みちひと)教授(宗教社会学)は「教団や宗教家の看板を表に出しすぎると『布教や宣伝のためではないか』と違和感を与えかねない」と指摘する。一方で、心の問題での期待もある。

「医師やカウンセラーらは専門的な技能でかかわる。宗教者は、総合的に対応できないだろうか。教えよりも人間力。理想としては『あの人がこの苦しみを受け止めてくれそう』と頼りにしてくれる姿だ」

阪神大震災後は、高齢者の孤独死などが問題となった。今回も心のつながりをどう確保していくかが課題だろう。「宗教者には、独りぼっちになった人に日常的に寄り添うことも期待したい」と対馬教授は話している。